

語云、天皇者皆婚入田若郎女、而晝夜戲遊、若大后不聞、看此事乎、靜遊幸行、爾其倉人女、聞此語言、即追近御船、白之狀、具如仕丁之言、於是大后大恨、怒載其御船之御綱、柏者悉投、棄於海、故號其地謂御津前也。

〔古事記傳 三十六〕御津崎は、書紀、仁賢卷六年に難波御津、齊明卷五年に難波三津之浦、萬葉一丁廿六

に、大伴乃御津乃濱松、又丁廿七 大伴乃美津能濱、三丁十五に三津崎、十五丁に大伴乃美津能等麻里

などなほ多し、古難波より船發するに、主と此津より發、又此津に泊たりし事、萬葉の歌どもに

數多よめるが如し、かくておのづから難波の内の一の地名となれるなり、難波古圖に、高津の

西方海邊に、三津里、三津濱あり、其處なるべし。

〔萬葉集 雜歌〕柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首 首略

三津崎浪矣、恐隱江乃舟、公宣奴島爾。

〔萬葉集 春相聞〕天平五年癸酉春閏三月、笠朝臣金村贈入唐使歌一首并短歌。

玉手次不懸時、無氣緒爾、吾念公者、虛蟬之命、恐夕去者、鶴之妻、喚難波方、三津崎從、大船爾、二梶繁貫。

白浪乃高荒海乎、島傳伊別往者、留有吾者、幣引齋乍、公乎者、將往待恐、早還萬世。

〔日本書紀 神武〕戊午年二月丁未、皇師遂東、舳艫相接、方到難波之碕、會有奔潮太急、因以名爲浪速

國亦曰浪華、今謂難波訛。

○按ズルニ、難波之碕、即チ御津崎ナルベシ。

〔萬葉集 雜歌〕幸于伊勢國時、留京柿本朝臣人麿作歌。

劍著手節乃崎、二今毛可母、大宮人之玉藻、苺良武。

〔新編相模國風土記稿 九十七〕稻村崎 海岸ニ突出シテ、其形稻ヲ積タル如シ、故ニ名ヅクト云フ、

高三 東面ヲ靈山崎ト唱ヘ、坂之下村 西面ヲ稻村崎ト呼ブ、

相模國 稻村崎

志摩國 答志岬